て,「ある特殊の商品を実際に排除し,一般的等価物を現実につくり出す」(23頁)ことがのべられているのである。

本書の中心的な2つの問題と思われるものについての著者の所説の要旨は,以上のようなものであるが,これらのほかになお前篇の末尾において,『資本論』第1章と第2章と第3章の関係が,素描的に示されている。その結論だけを示せば,第1章の第3節と第4節と第2章とでは,それぞれ「如何にして」,「何故に」,「何によって」(wie, warum, wodurch)商品が貨幣となるかが論じられ,これで主体としての商品がその矛盾の媒介のために貨幣形成を必然化することが把握される。そして,これを受けた第3章では,こんどは貨幣が一定の機能を行う主体となってあらわれる,というものである。

本書を一読して,われわれのただちに気づくことは,たとえば,はじめにのべられた「価値形態論における欲望捨象の当否の問題は,本質的には,価値形態論の課題が何であるかによって決定さるべき方法上の問題である」(4頁)という言葉からもわかるように,著者のすぐれて方法的な態度である。著者は,本書のいたるところで「中心的な課題」とか「固有な任務」とか「特有な問題」とかの言葉をくりかえし用いているが,それは,価値形態論および交換過程論において,マルクスがなにを問題にしそれをどのような方法で解明しているかを,マルクスに則しつつ理解されようとする上述の著者の態度のあらわれである。こうした態度につらぬかれた本書は,その深い資本論理解にうらづけられて,本書の所説を精密で説得力あるものにしており,したがって著者の宇野説批判は成功していると思われる。わたくしはまた,価値形態論と交換過程論の関係についても,いままではっきりしなかった多くのことを教えられた。すでに本書については,「戦後のわが国『資本論』研究の水準を示す労作」という評価が与えられている(『思想』1957年11月号所収,伊藤光晴・佐藤金三郎「経済学界の動向」)が,かかるものとして本書は,今後ながく読みつづけられるものであろう。

なお,本書においては,価値形態論の課題を分析して,商品の価値が他商品の使用価値によって表示されるという「異様な事実」の解明をあげ,マルクスによるその解明の仕方いかんに著者の関心が向けられていること,うえにのべたとおりであるが,そこでは,価値形態論における形態発展の問題は論じられていない。これは,当面するもっとも重要な問題を解明するという著者の限定的な態度とも関連するのであろうが,この形態発展を言葉としてではなく内容的にいかに理解するかは,戦後におけるわが国の価値論研究において,中心的な課題の1つであったはずである。著者に残された問題として,この点にかんする解釈のやがて発表されることを期待しつつペンをおく。

〔宮鍋　幟〕

ペ・カ・フィグルノフ

## 『ヨーロッパ人民民主主義諸国における社会主義経済の建設と外国貿易の発展』

エフ・ペ・ブィストロフ,ゲ・エス・ロパチン監修

## 『人民民主主義諸国の国際決済と通貨関係』

П. К. Фигурнов《Строительство социалистической экономики и развитие внешней торговли в европейских странах народной демократии》внешторгиздат. Москва, 1955. стр. 112

Ф. П. Быстров, Г. С. Лопатин《Международные расчеты и валютные отношения стран народной демократии》внешторгиздат. Москва, 1956. стр. 127.

I　ここ1,2年間に,我国の経済学者のあいだで,社会主義国際分業の性格や社会主義世界市場における価値法則と価格形成の問題,さらには社会主義諸国の貿易政策の問題など,広い意味での社会主義貿易理論に深い関心がよせられ,また若干のすぐれた研究も発表されている。というのは,例の『エコノミスト』誌上での名和,野々村両教授の社会主義貿易論争による成果とそれ以後に発表されたその他の若干の論文を指すわけであるが,それにはそれだけの現実的な根拠がある。

すでに指摘されているように,1956年度は,社会主義諸国相互の経済関係における明暗両側面を反映した劃期的な年であった。戦後10数年を経て社会主義国際分業の体制は着々と整備されてきたが,とくに1956年には,社会主義諸国で各国民経済計画の同時遂行に着手され,またその調整手段として多角的な長期貿易＝支払協定が締結されて,社会主義経済協力は新たな飛躍的段階に入った。他方,同じ年の秋に勃発した東欧動乱は,一部の人民民主主義諸国の社会主義建設過程での過度の工業化やその劃一的指導,あるいはソ同盟とポーランドとの貿易取引の価格面での不平等関係などの形で,右の経済協力における若干の欠陥を明かにした。このような社会主義貿易の発展における事態のいちじるしい変化に直面して,これをどのように評価するか,また従来ややもすると公式的,概念的に割切られてきた観のある理論をどの

ように具体化し精密化するかが，われわれ社会主義経済の研究者にとって，当然の関心の的となったのである。

ところで現実に社会主義国際分業の体制に参加し，社会主義貿易を計画的に運営しているソ同盟はじめ中国，東欧の人民民主主義諸国の経済学者の研究状況はどうか。周知のように，すでに我国でも翻訳，紹介された東独のコールマイ教授の『社会主義世界市場』(1956年刊，松井清，吉信粛共訳)が発表されているほか，近年かなり多くの書物，論文の形で社会主義貿易の実証的，理論的研究がすすめられていることは事実である。もっとも時期的なずれもあって，われわれが現在利用できる文献に，1956年の事態の変化にたいする十分な評価やこれを理論面に反映した体系的な見解を期待することはできない。

ソ同盟の経済学者が執筆した表記の2つの書物も，右の制約をまぬがれないし，またコールマイの著書のような大作でもないが，それでも社会主義貿易における価値法則，価格形成や人民民主主義諸国の通貨，国際決済の問題について，従来より前進した問題提起と未知の事実の提供とによってわれわれに示唆するところがかなりある。本稿では，両書のなかで理論的に興味のある部分をえらび，その中心内容をなるべく忠実に紹介したうえ，最後に一括して簡単な私見をつけ加えたいと思う。

そのまえに例によって両書の章別編成を簡単に示しておく。まずフィグルノフの書物は，第1章中欧・南東欧諸国における人民民主主義制度の成立と発展，第2章ヨーロッパ人民民主主義諸国における過渡期の経済，第3章社会主義経済の基礎の建設，第4章人民民主主義諸国の経済関係における外国貿易の役割の各章からなっている。またディストロフ，ロパチンの書物は，第Ⅰ編人民民主主義諸国の通貨関係，対外決済，信用関係および第Ⅱ編個々の人民民主主義諸国の通貨の2編からなり，第Ⅰ編は3章に分れ，それぞれ第1章通貨関係，国際収支国際貸借，第2章対外決済制度，第3章信用関係となっている。ただし，いま述べた趣旨から，筆者がとりあげるのは，主に前書の第4章と後書の第Ⅰ編の第1章，第2章とである。

**II**　まず社会主義世界市場における価値法則と価格形成の問題からみていこう。このばあい主として対象になるのはフィグルノフの書物であるが，その第4章から彼の見解を一般的に要約すると，つぎのとおりである。(1)社会主義陣営に参加する独立諸国間の経済関係は，商品＝貨幣関係の形態をとり，したがって生産手段をふくむすべての労働生産物が，商品として民主主義世界市場にあらわれ，価値法則の作用に支配される。(2)しかしこれらの商品の所有者は個人でなく社会主義国家であるから，民主主義世界市場での価値法則は，資本主義世界市場におけるように無制限の作用範囲をもたない。(3)価値法則は，民主主義世界市場では盲目的，自然成長的な力として作用せず，社会は，この法則を認識し，これを社会のために利用する。(4)民主主義世界市場では，資本主義貿易に特徴的な不等価交換，投機的な価格吊上げ，急激な価格変動が除去されている。社会主義諸国間のすべての商品取引，輸出入の規模と構成は，社会主義の基本的経済法則，国民経済の計画性ある，釣合のとれた発展法則の要求にしたがって計画化される。民主主義世界市場における価格形成過程もまた，この法則にもとづいておこなわれる(104—105ページ)。

フィグルノフは，さらに，社会主義諸国が価格を計画的に決定するばあい，当然，それぞれの国内で生産される商品の社会的＝必要労働，すなわち価値の大きさと資本主義世界市場での価格水準とを考慮しなければならないと指摘している。このさいとくに注目されるのは，社会主義世界市場における商品の国民的価値と国際的価値との形成過程，および両者の関係についての彼の見解である。

「現在では，社会主義陣営諸国の経済的，技術的発展の水準，労働生産性の水準が異っている。この事情は，社会主義陣営諸国における商品の国民的価値の差異をも規定する。経済的，技術的に発展した国々では，その未発展の国々におけるよりも国民的価値が低いが，またその逆の関係も成立する。だが民主主義世界市場では，社会主義陣営諸国で生産される同一商品について諸国民的価値とは異った国際的価値が形成され，またこれにもとづいて単一の国際価格が形成されていく傾向がみとめられる。このばあい，注目されるのは，人民民主主義諸国での社会主義的工業化と農業の社会主義的改造，労働生産性の向上にもとづいて諸国民的価値がたがいに接近し，またそのため国際的価値と諸国民的価値との差異が除去される過程がすすんでいることである」(105—106ページ)。

ソ同盟の経済学者で，社会主義世界市場における価値法則と価格形成の基本的な問題に，国民的価値と国際的価値という概念を導入したのは，おそらくフィグルノフが最初だと思う。ここで彼の見解をさらによく理解するために，資本主義世界市場におけるこれらの問題の説明をつけ加えておこう。フィグルノフによると，資本主義世界市場では，商品の価格が国際的価値によって規定される。資本主義のもとでは，国際的価値と国際価格の形成が，発展した資本主義工業諸国による後進諸国の経済的奴隷化と搾取，不等価交換と必然的に結びついている。

後進諸国にくらべて経済的，技術的発展の水準がいちじるしく高い「先進」資本主義諸国は，資本主義世界市場で，自国商品を，その国民的価値をはるかに上廻る価格で販売する。また経済的後進諸国は，自国商品をその国民的価値よりはるかに低い価格で販売することをよぎなくされる。このことが「先進」諸国の資本家にとって高利潤を獲得する1つの源泉になっている。さらに，帝国主義と資本主義の全般的危機の時期には，国際的価値と諸国民的価値とのギャップがいっそう拡大する。帝国主義者によって決定される独占的世界価格は，国民的価値のみならず国際的価値からもいちじるしく乖離する。その結果，不等価交換は増大し，後進諸国人民の収奪は強化され，独占体の最大限利潤は上昇する(106ページ)。

さてフィグルノフは，民主主義世界市場での価格決定の手続きについてはあまりふれていない。この点は，ブィストロフ，ロパチンの書物でいっそう具体的に説明されているから，その箇所を要約しておこう。同書の第1章によると，社会主義諸国間の貿易は，相互に引渡される商品の公正な安定した価格から出発し，等価交換にもとづいて実施される。これらの価格は，当該商品の世界市場価格を基礎にして協定によって決定され，長期にわたって不変である。だがこのような価格決定の手続きは，資本主義世界市場価格が社会主義貿易にも自動的に適用されることを意味するのではない。資本主義経済の否定的側面に結びつく価格変動は，社会主義諸国間の貿易関係に反映しない。社会主義世界市場における価格は長期にわたって不変であり，また安定している。価格改訂が実施されるのは，通常，商品取引協定が締結されたとき，それも世界市場で価格水準のいちじるしい，かつ長期の変化が生じたような商品種類にかぎられる。一定期間にわたる協定や契約が締結されたとき決定された価格は，その期間中は変更されない。このことが，社会主義諸国の国際収支や対外決済の安定した基盤を形づくっている(7ページ)。

**III**　人民民主主義諸国の通貨関係と国際決済の問題をとりあつかったブィストロフ，ロパチンの書物では，内容の性質上，それらの組織と機能にかんする実状の解説に重点がおかれている。第1章では，まず人民民主主義諸国の通貨政策が，ソ同盟と同様，通貨の国家独占の制度に基礎をおいていること，金，銀，外貨および外国有価証券の取引業務がすべて国立中央銀行に排他的に集中され，外国為替業務と対外決済業務もその例外でないことが明かにされている(8—9ページ)。つづいてこれらの国々の貨幣制度の確立と為替相場の安定が，ブルガリアの1945年の通貨改革をはじめ1950年までに相ついで実施された各国の通貨改革によって達成されたことが強調されている。これらの通貨改革では，(1)戦時中に流通していた余剰通貨の回収，(2)旧通貨と交換に発行された新通貨による貨幣制度の統一，(3)新通貨の金含有量とその外貨にたいする為替相場の確立という一連の措置が採られたのである(11ページ)。

このばあい注目されるのは，1950年度のソ同盟の通貨改革をもって社会主義世界市場における統一的な国際通貨＝決済制度が完成されたことである。同書によると「1950年3月1日以後，ドルを基礎とするルーブリの対外相場の決定方式が廃止され，ルーブリ貨が1ルーブリあたり0.222168グラムの金含有量をもって，安定した金の基礎へ移行したために，また大多数の人民民主主義国通貨の新しい金含有量が確定された結果として，現在，これら諸国通貨の対ルーブリ為替相場は，金平価にしたがって決定されている。人民民主主義諸国通貨の諸外貨にたいする相場の決定は，それら通貨の金含有量と対ルーブリ為替相場を基礎にしておこなわれている」(12ページ)。1955年末現在(1957年11月現在でも同様である—筆者)における社会主義諸国通貨の金含有量とそれらの対ルーブリ為替相場はつぎの2表のとおりである。

第1表　社会主義諸国通貨の金含有量(単位純金グラム)

| | |
|---|---|
| ポーランド | 1ズロチー＝0.222168 |
| ハンガリー | 1フォリント＝0.075757 |
| チェコスロバキア | 1クローネ＝0.123426 |
| ルーマニア | 1レオ＝0.148112 |
| ブルガリア | 1レフ＝0.130687 |
| ドイツ民主共和国 | 1マルク＝0.399902 |

第2表　社会主義諸国通貨の対ルーブリ為替相場

| | |
|---|---|
| 中華人民共和国 | 100ヤン＝200ルーブリ |
| ポーランド | 100ズロチー＝100ルーブリ |
| ハンガリー | 100フォリント＝34ルーブリ10コペーカ |
| チェコスロバキア | 100クローネ＝55ルーブリ56コペーカ |
| ルーマニア | 100レオ＝66ルーブリ67コペーカ |
| ブルガリア | 100レフ＝58ルーブリ82コペーカ |
| アルバニア | 100レク＝8ルーブリ |
| ドイツ民主共和国 | 100マルク＝180ルーブリ |
| 朝鮮人民民主共和国 | 100ウォン＝3ルーブリ33コペーカ |
| モンゴル | 100ツグリク＝100ルーブリ |

(注)　両表ともにブィストロフ，ロパチン『人民民主主義諸国の国際決済と通貨関係』12ページから転載。

さて社会主義諸国間の商品取引にもとづく対外決済は，世界市場価格を基礎にしてルーブリ貨でおこなわれている。したがって，これら諸国通貨の為替相場は，商品取引の対外決済と直接には結びつかず，かりに右の為替相場が変更されることがあっても，それは商品相互引渡高にも，ルーブリで表示される対外債務にも影響しない。さらにルーブリは，国際決済手段として，社会主義諸国間の商品取引のみでなく，信用関係，非商業取引の分野にも適用される。これら諸国間の通貨流通の大部分は，

ルーブリで表示され，清算勘定で実施される。清算勘定には，主として商品相互取引にもとづく収支が反映している。このばあい，ルーブリは，国際決済の分野でのたんなる計算単位にすぎないかのようにみえる。しかし実際には，清算勘定面のルーブリは，社会主義陣営諸国間の商品＝財貨価値物の運動を反映しているのである(13—14ページ)。

以上に述べたような，社会主義諸国の金平価を基礎にした通貨制度とルーブリを国際決済手段とする統一的な国際通貨＝決済制度の現実から，社会主義世界市場における国際金本位制の成立を結論づけることも可能なわけであるが，同書ではそのような特徴づけは試みられていない。

第2章では，人民民主主義諸国の国際決済の方式とその実務的な手続きが，社会主義陣営内部のばあいと対資本主義陣営諸国のばあいとに分けて考察されている。前者の決済の基礎にあるのは社会主義諸国間の計画的な経経済関係であって，諸国民経済計画を実務的に調整し，生産の専門化と協業化にもとづく国際分業を発展させるために，商品取引を不断に拡大し相互決済を支障なく実行することが，この制度の主要な特質である。また後者の決済の基礎は異った経済体制の競争を表現する異った経済関係であって，資本主義経済の盲目的発展に結びつく各種の危険，たとえば資本主義諸国通貨の価値下落，輸出商品代金の不払や封鎖などのリスクをまぬがれるのが，この制度の主要な目的である(18ページおよび33ページ)。

社会主義諸国間の決済の手続きは，非商業取引を別にすれば商品相互引渡協定＝支払協定にかんする政府間協定によって規定され，その主要な形態は清算決済方式である。この清算決済は，商品引渡協定の実施過程を管理し，双方の平等な支払条件を確保し，非現金決済による節約を可能にする有効な決済方式である。清算決済方式のうち現在その大部分は双務決済によっているが，社会主義世界市場では3角清算決済方式をへて多角清算決済方式へ移行する傾向がみとめられる。つぎに人民民主主義諸国の対資本主義諸国との決済の大部分も，現在，主として，政府間の貿易＝支払協定に結びつく双務清算決済方式によっているが，このばあいの形式上の類似にもかかわらず，上述の各種のリスクの回避が人民民主主義諸国の側からみた，この制度の目的である。清算機関，清算の範囲，清算にもちいられる決済通貨など多くの技術的な問題があるが，ここでは，決済通貨として(1)相手方の資本主義国通貨(2)ドル，ポンドなどの交換性通貨(3)自国および相手国の双方の通貨(4)ルーブリ(5)約定決済単位(東西両独間のマルク)がもちいられている(34ページ)ことを指摘しておく。

**IV**　以上，両書における問題点の選択と整理の方法に，すでに紹介者の主観をまじえたが，ここで若干の疑問と私見を述べてみよう。

まず社会主義世界市場における価値法則と価格形成の問題について。フィグルノフがこの問題の解明に国民的価値と国際的価値の概念を導入したのは，興味ある現実接近の方法だと思う。社会主義世界市場でも，生産力と労働生産性の発展水準の差異から，先進国と後進国との，それぞれの価値体系に差異のあることは，当然考慮にいれてよいからである。ただフィグルノフの見解では，叙述が簡単なためでもあるが，資本主義諸国間の商品交換と本質的に区別される社会主義諸国間の商品交換の質的徴表の論証が，なお不十分である。彼もまた，従来の他のソ同盟経済学者と同様に，社会主義貿易では不等価交換が存在しないと主張しているが，そのことは，社会主義世界市場では商品が国際的価値あるいはこれにもとづく国際価格で交換されるという事態をさしているのかどうか不明瞭である。かりにそうであるとすれば，社会主義世界市場での国際的価値は社会主義諸国の諸国民的価値の平均量として規定されるのか，あるいは先進国の国民的価値を基準として成立するのか，さらには資本主義世界市場価格との関係いかんといった疑問に答える必要があるだろう。これは社会主義の価格決定基準の問題にも関連する。

以上のばあい，社会主義世界市場でも，生産力水準の低い後進国は，自国商品をその国民的価値以下の国際価格で販売することになるわけであるが，このような事態は資本主義貿易についてすでに論証されている。しかも前者については等価交換を，後者については不等価交換を理論的に主張するには，なお分析を深め精密化する必要がある。資本主義世界市場では，とりわけ帝国主義段階では国際的価値と諸国民的価値とのギャップがいちじるしいとかそれは国際的搾取に必然的に結びつくとか主張しても，また他方，社会主義世界市場では社会主義国際分業の発展とともに各国の工業化の平準化作用がすすんで，諸国民的価値が国家価値に接近しつつあると主張しても，その間の量的な差異を区別するだけでは，読者を納得させることはできないだろう。このほか，ブィストロフ，ロパチンの見解でも，社会主義貿易の等価交換が主張されているが，両書をつうじて，これを，たんに価格面での高低の問題としてでなく，基本的な価値法則の側面から把握しようという努力がみとめられない。

つぎに人民民主主義諸国の通貨と国際決済について。

第1の問題は，ソ同盟のルーブリをふくめて社会主義諸国の通貨の為替相場が金平価を基準として決定されているとして，このばあい各国通貨による商品の購買力がどの程度考慮されているかという疑問である。ソ同盟では，1950年3月の通貨改革のさい，国内でのルーブリの購買力と商品物価の水準および米ドルの購買力を考慮して現在の1ドル＝4ルーブリに決定されたという公式見解が発表されたが，その後，各国通貨の国際自由市場では，ルーブリが公定相場の4分の1程度で取引されていると報じられている。他の社会主義諸国通貨の公定相場もこれと同様，一般に実勢よりも過大評価されている傾向がみとめられるが，ブィストロフ，ロパチンの書物では，このような通貨の金平価と購買力平価とのギャップを説明するのに参考となる見解はみとめられなかった。この点も，今後に残された重要な理論的課題であろう。

なおこのことにも関連するが，前述のように社会主義諸国の通貨の為替相場が金平価を基礎とし，またルーブリが社会主義世界市場で代表的な国際決済手段として通用していることから，社会主義市場での国際金本位制の成立をみとめる若干の論者がある。しかしこの問題については，かつての20年代の資本主義金本位制のもとでは，金貨の自由鋳造，自由兌換，輸出入の自由という3原則が妥当していたが，社会主義諸国の計画経済と通貨の国家独占の制度のもとでは，このいずれの原則も欠けていることを指摘するにとどめておく。

以上，書評の範囲をかなり逸脱した紹介になった。個々の重要な理論問題について改めて綿密な分析を試みたいと思う。

〔寺村鉄三〕

エイチスン，ブラウン

## 『対数正規分布』

J. Aitchison & J. A. C. Brown, *The Lognormal Distribution, with Special Reference to its Uses in Economics*. Cambridge, 1957, pp. xviii, 176.

**I**　経済現象，社会現象において見られる分布においては，非対称分布が，例外ではなくむしろ原則である。非対称分布を取扱う場合に対数正規分布を適用し得る範囲が広いことは古くから認められていることではあるが，対数正規分布を体系的に説いた書物はこれまでにはなく，ただ時折その応用が論じられて来ただけであり，研究の歴史はあるときは連続性を欠き，あるときは単なる繰り返しを見せるだけのものであった。

本書は対数正規分布について，その性質，推定の方法や問題，応用を包括的に論じた唯一のものであって，上述のようなこの分布の研究の歴史において画期的なものといえる。しかし，このような書物がこれまで敢えて世に出されることがなかったのは，数理統計学的には対数正規分布は正規分布の1つの派生分布に過ぎないと考えられることを最大の理由とするのであり，実際本書を手にする読者のほとんどすべては，よく知られている正規分布および対数函数の性質以外に何が本書で論じられるのであろうかといぶかることであろう。本書の内容はそのような疑問にたいする回答でもある。

対数正規分布は，最も簡単には，その対数が正規分布に従うような変数の分布と定義される。従ってその性質の多くは正規分布の性質から直接に誘導できるものであるが，正規分布論におけるものと異なるいくつかの特徴もある。その例として，積率分布 moment distribution の概念，2つ以外の追加的パラメーターの導入，推定手順における特殊な問題などがある。これらを含めて対数正規分布に関する知識を体系化し，その広汎な応用の可能性の開拓に備えようというのが本書のねらいである。

**II**　本書は，対数正規分布の性質，推定や計算に関する諸問題を論じた部分(第9章までと第13章)と，対数正規分布の実例やその応用を取扱った部分(第10章から第12章まで)とに大別することができる。

対数正規分布に従う変量(これを $\Lambda$ 変量といい，その分布函数を $\Lambda(x \mid \mu,\sigma^2)=P\{X\leqq x\}$ と書く)の積率，分位数などの特性値，$\Lambda$ 変量の積に関しての分布の再生的性質，中心極限定理，積率分布，3個パラメーターおよび4個パラメーター分布など，対数正規分布の一般的性質が第2章で述べられる。このうち積率分布の概念は正の確率変数についてのみ意味があるものであり，正規分布論においてはその類似物を見出し得ないものである。$\Lambda(x \mid \mu,\sigma^2)$ の $j$ 次積率分布函数は，$X$ の原点のまわりの $j$ 次の積率を $\lambda_j'$ とするとき，

$$\Lambda_j(x \mid \mu,\sigma^2)\equiv\frac{1}{\lambda_j'}\int_0^x u^j d\Lambda(u \mid \mu,\sigma^2)$$

で定義され，

$$\Lambda_j(x \mid \mu,\sigma^2)=\Lambda(x \mid \mu+j\sigma^2,\sigma^2)$$

という性質が成り立つ。これは所得分布論において，対数正規型所得分布におけるジニの平均偏差係数と分布のパラメーターとの間の関係を求めることなどに利用される。また，3個パラメーター分布は $X'=X-\tau$ が，4個パラメーター分布は $X''=(X-\tau)/(\theta-X)$ がそれぞれ $\Lambda$ 変量であるときの $X$ の分布のこと.をいう。ここで $\tau$，$\theta$ はパラメーターである。

対数正規分布の再生的性質，中心極限定理などは，正